

論文：

# テレサ・トゥシンスカ(1942-1997年) —女優として、モデルとして—

渡辺 克義

山口県立大学国際文化学部

Teresa Tuszyńska (1942-1997) as an actress and a model

Katsuyoshi WATANABE

Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

This article is a brief biography of Teresa Tuszyńska (1942-1997), Polish actress and model. Author indicates how she appeared in film and fashion society, and why she resigned from them suddenly.

## はじめに

1950年代末にポーランド映画界・モデル界に彗星のごとく現れ、1970年代初めに忽然と姿を消した一人の女性がいた。テレサ・トゥシンスカ (Teresa Tuszyńska) その人である<sup>1</sup>。2013年に彼女に関する評伝 (Miroslaw J. Nowik, *Tetka. Wspomnienia o Teresie Tuszyńskiej*, Warszawa: Prószyński i S-ka) が上梓され<sup>2</sup>、その後、別の著者によるエッセイも複数著されている<sup>3</sup>。また本邦でも「ポーランド映画祭2012」(主催：ポーランド広報文化センター、共催：マーメイドフィルム / VALERIA / スコピャ・フィルム)で、彼女が主演した、ヤヌシュ・モルゲンシュテルン (Janusz Morgenstern) 監督の1960年の作品「さよなら、また明日」(*Do widzenia do jutra...*) が公開され、翌年 DVD / Blu-ray 化もされた(発売元：紀伊國屋書店)。

これまでほとんど知られることがなかったトゥシンスカ像を示すことが本稿のねらいである。

## 1. 幼年時代

テレサ・トゥシンスカは1942年9月5日、父アントニ (Antoni)、母ヤニナ (Janina) [旧姓・ゴントアレク (Gontarek)]のもと、ワルシャワのボレハ通り21番地 (ul. Bolecha 21) で生まれた。テレサには5歳上の兄ボグダン・トゥシンスキ (Bogdan Tusiński, 1937年8月29日生) がいる。1942年9月13日、テレサは自宅近くの教会 (Parafia św. Józefa) でカトリックの洗礼を受けた。教会の記録によれば、彼女の苗字は Tuszyńska である。一方、両親、

兄、9歳違いの妹ヴァツワヴァ (Wacława) の苗字は Tusiński / Tusińska である。-ski 型の苗字は女性では -ska となるが、ここで問題にしているのは、-szy- と -si- の違いである。

さらに奇妙なことには、父親が営んでいた精肉店の看板には Tuszyński と掲げられていたという。-szy- と -si- の違いは日本人の多くの耳には同じように響く(実際、カナ表記では違いがだせない)が、ポーランド語では本質的に別の音であり、母語話者では混同することはまず考えられない。戸籍上のこの違いはどこからくるのか。ボグダン・トゥシンスキは、これが事務方の誤りだったのではなかろうかと考えているが<sup>4</sup>、それだけではないように思える。父親が何かの理由で Tusiński と Tuszyński の2姓を使い分けていたことが混乱の原因であろう。ともあれ、家族で Tuszyńska 姓が戸籍に登録されているのはテレサだけである。

テレサは戦争開始後3年目に生まれた。生と死が日常の日々を送る中で、テレサの一家も数奇な体験をしている。テレサと兄と母の3人はある日、オシフィエンチム (アウシュヴィツ) 行きの家畜運搬車に載せられた。父親はそれ以前にドイツに強制労働に送られている。途中の停車駅で、ある鉄道員が機転を利かせ、3人を救い出し、匿った。この鉄道員は何者かに密告されてゲシュタポに捕まったが、テレサ一家は隠れつづけることができた。戦後、一家はこの命の恩人に感謝したいと思い、方々を探したが、見つけることができなかった。ゲシュタポに殺害されたのかもしれない。テレサ一家はその後、戦争が終結するまでラドム県のジャルヌフ

（Dziarnów）の親戚のもとで過ごした。戦後、家族はワルシャワの家に戻った。家屋は奇跡的にも戦災に遭っていなかった。2年後に父親がドイツから戻り、精肉店を再開した<sup>5</sup>。

## 2. 学業

テレサは学業に関しては熱心とはいえなかった。しかし、最終的には義務教育を優秀な成績で終えたい（成績簿が残っていないので、憶測の域をでない）。というのも、1957年に、国立演劇技術高校（PLTT: Państwowe Liceum Techniki Teatralnej）に入学しているからである。同校は劇場の裏方に従事する専門家を養成する学校で、入学にあたっては、中学で優秀な成績を収めていることが前提条件になっていた<sup>6</sup>。

ワルシャワのミョドヴァ通りにあるPLTTでは将来の映像作家の巨匠クシシュトフ・キェシロフスキ（Krzysztof Kieślowski）と同学年であったが、テレサは女子クラス1a、キェシロフスキは男子クラス1bで、ふたりの間に接点らしい接点はなかったらしい<sup>7</sup>。

テレサはPLTTから放校処分に遭う。雑誌数誌に写真が掲載されたことがその原因らしい。現存する写真や映画で見るテレサの美貌はずば抜けているが、その美しさは高校時代から各誌が目にするほどであったということであろう。テレサの評伝をエッセイ風にまとめたキーンズレルによれば、放校処分の背景には、若い男子がテレサに夢中になり騒いだことがあるのではないかと<sup>8</sup>。

兄のボグダンがSPのように働いてくれたので、テレサが羽目を外すようなことはなかった。ただ、ワルシャワ大学の学生クラブ「ハイブリッド」（Hybrydy）などに入出入りしていたことは除く。「ハイブリッド」には18歳未満の者は入ることができなかったが、ボグダンの庇護下にテレサはそうした場所に足を運ぶことができた<sup>9</sup>。

ダンスホールで踊る長身（ハイヒールを履いた時の背丈が175cm前後。身長は170cmほどだったようだ）の美しいテレサに目を付けたのが、「夕刊エクスプレス」（*Express Wieczorny*）紙のカメラマンのアンジェイ・ヴィエルニツキ（Andrzej Wiernicki）であった。彼はたびたびテレサの写真を雑誌に載せた。こうして、テレサの顔は世間に知られていくことになった<sup>10</sup>。

当時16歳のテレサが「女性と生活」（*Kobieta i Życie*）誌の4月1日号の表紙を飾ると、高校は母親を呼び出した。母親はヴィエルニツキに、娘を不良にするつもりか、と抗議した<sup>11</sup>。

テレサの“非行”はこれだけではなかった。1958年の謝肉祭で「ミス・ストドワ」（*Miss Stodoły*）

〔*Stodoła* はワルシャワ工科大学の学生クラブ〕に選ばれたのである。彼女が“夜遊び”をつづけていることを証明する形となった。夜遊びをしているとはいえ、彼女の学業成績は良好であった。しかし、しだいに学校から足が遠のくようになる。PLTTの第3学期では89時間も欠席し、しかもそのうち82時間については他者を説得するだけの理由が示せなかった。成績も7科目で不可をもらい（最大の不得意科目はロシア語で、3学期連続で不可だった）、ついには退学せざるをえなくなったのである<sup>12</sup>。

## 3. 映画界へ、モデル界へ

ヴィエルニツキは各誌にテレサの写真を送り続けた。そんななか、「断面」（*Przekrój*）誌が1958年2月16日号（nr 671）で「映画界が若い女優を探しています」（*Film szuka młodych aktorek*）という募集記事を載せた<sup>13</sup>。公募要件は、17歳から23歳までであること、演技ができること、容姿端麗であることであった。また、できれば高卒以上の学歴があることであった。1200通を超える応募があり、一次審査を通過した28名がウッチでの撮影会に招待された。「断面」の復活祭特別号（nr 677-679）と4月20日号（nr 680）はこの28人の写真を載せている。最終的に選ばれたのは、テレサ・トゥシンスカであった。テレサは「断面」の1958年6月1日号（nr 686）の表紙を飾った。後年、ヴィエルニツキは回顧する。「（テレサが）本当に女優に向いていると私は思っていました。美人であり、並び方、衣装の身に着け方、口の動かし方、視線の向け方について心得ていました。言われなくても、すべて知っていました。当時まだ16歳の高校生だったのに、この方面（演劇）の学校を出ていなかったのに、です。彼女には持って生まれた才能がありました」<sup>14</sup>。

選考委員会は満場一致でテレサを選んだが、彼女は年齢（当時16歳）と学歴（高校中退）の2つの点をクリアしていなかった。しかし、彼女の器量が優先され、それらの点は問題にされなかった。

テレサはヤン・リュプコフスキ（Jan Rybkowski）監督の映画「最後の矢」（*Ostatni strzał*）に出ることが決まり、1958年7月からミコワイキほかで撮影に入った。しかし、彼女は撮影現場を抜け出し、ワルシャワに戻ってしまう。この前代未聞の事態にもかかわらず、次の映画出演のオファーがあった。ヤン・ザジツキ（Jan Zarzycki）監督の映画「白熊」（*Biały niedźwiedź*）である。「断面」誌は、テレサがマトウラ（高校卒業試験）に備え、スーツケースに教科書を一杯にして撮影に臨んでいると伝えた<sup>15</sup>。しかし実際には、テレサはマトウラを受ける気などなく、そもそも当時どこの高校にも籍がなかったのである。

1959年頃、テレサはポーランド・ファッション界の重鎮であるヤドヴィガ・グラボフスカ (Jadwiga Grabowska) と接点を持つようになる。テレサはこの時アルコールにはまる (後年、映画「離婚はしません」で禁酒主義者のヨアンナの役を演じるとは皮肉である)。グラボフスカは、ショーに出る前に景気づけとしてウォッカやコニャックを口にするのをモデルたちに許していたのである<sup>16</sup>。

グラボフスカは、モデルは単に美人であるだけでなく、教養人であること、バストが大きすぎないことを求めている。グラボフスカには、大きすぎるバストはエレガントとは思われなかったのである<sup>17</sup>。テレサの家系は知識人とはいえないであろうが、バストに関してはグラボフスカの要求を満たしていた。

#### 4. モルゲンシュテル監督「さよなら、また明日」(1960年)

テレサのデビュー作である「白熊」は不評だったが、1960年4月25日封切りの「さよなら、また明日」は高く評価された。監督のモルゲンシュテルンと言う。「今この瞬間に自分に関することを語っておかなければと思ったんです。自分の周囲の何かを示さなければと。自分が「ポーランド派」に入れないならば、新しい何かを創り出すんだと決意しました。こうして、「さよなら、また明日」は生まれたのです<sup>18</sup>。

「さよなら、また明日」は戦争の記憶とは無縁の作品で、戦後の青春像を描いた作品である。モルゲンシュテルンの監督デビュー作である本作品は、「存在の楽しい軽さ」(radosna lekkość bytu) [ミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』をベースにした表現] を描いたものであり、自身では「個人的雪解け」(prywatna odwilż) と名付けたことである<sup>19</sup>。

作品は、ヤツェク役を演じたズビグニェフ・ツイブルスキ (Zbigniew Cybulski) の実体験を基にしている (ただし、場所はソポトであり、映画で舞台になっているグダンスクではなかった)。主役のマルゲリート<sup>20</sup>役にテレサ・トゥシンスカを抜擢したのは、作中、ロメク役で出ているロマン・ポランスキ (Roman Polański) である。ふたりは、ザコパネで開かれたジャズ・キャンピングで面識を得ていた<sup>21</sup>。

脚本には、ツイブルスキ、ボグミウ・コビエラ (Bogumił Kobiela)、ヴィルヘルム・マフ (Wilhelm Mach) の3人の名前があげられているが、実際にそのほとんどを担当したのはツイブルスキであった。コビエラは対話部分の作成には協力している。しかし、マフは句読点を打つ作業にすら加わっていなかったようだ。一方、作家でもあるスタニスワフ・ディガト (Stanisław Dygat) が、脚本の草案

が示された段階で、原稿に手を入れたらしい<sup>22</sup>。

撮影担当のヤン・ラスコフスキ (Jan Laskowski) の回想によれば、テレサの演技は素人離れしていたらしい。ただ、最後の別れのシーンでなかなか涙が出せなかったようだ。この場面の撮影では、ツイブルスキが煙草の煙をテレサの顔に吹きかけ、泣かせたとのこと<sup>23</sup>。

マルゲリートの声は吹き替えられている。吹き替えを担当したのは、アメリカ人のエレオノラ・カウジンスカ (Eleonora Kałużńska) [映画評論家ズィグムント・カウジンスキ (Zygmunt Kałużński) の当時の夫人] である。彼女はその頃米語訛りのあるポーランド語を話していたらしく、本作品ではその点が活かされている。

「さよなら、また明日」は大衆から高く評価された<sup>24</sup>。映画評論家からも好意的な評価が多かった。マリアン・ビェリツキは、「それにしても、テレサ・トゥシンスカにはあっぱれだ。容姿だけを問題にして言っているのではない。この映画は彼女の個人的な勝利なのだ」と、絶賛している<sup>25</sup>。また、イェジ・プワジェフスキは次のように記している。「ここで忘れてはいけないのが、テレサ・トゥシンスカである。「さよなら、また明日」の中で、繊細で緊張した様子の彼女は、眠りから覚まされた魔法にかけられた王女のように咲き誇った。その少女的魅力と新鮮さで魅了した。エレオノラ・カウジンスカが声を貸し、ポーランド語を滑稽なポーランド語らしきものに変え、テレサに一層の魅力を添えたのである<sup>26</sup>。一方で、テレサの演技よりもエレオノラの声の方に高い評価を与えた評論家もいた。テプリツの見解は次のとおりである。「彼〔ツイブルスキ〕と共に演じたのが、非常に美しいテレサ・トゥシンスカである。しかし、彼女の最大の長所は銀幕の外にある。私には、エレオノア・カウジンスカの声のことが念頭にある。エレオノアは主人公の問題をブロークンなポーランド語で語る。豊かな抑揚のある、知的で興行のあるこの声を聞くと、その声の持ち主を目にすることができないことを残念に思う<sup>27</sup>。

たしかに吹き替えの効果は小さくなかった。発音は言うに及ばず、文法や語彙でも外国人に多く見られる誤りが取り入れられている。例をいくつか示す。

マルゲリートがヤツェクに初めて話しかける場面では、„Przepraszam, czy pan może za chwilę trzymać mój pies?” と言っている。男性活動体名詞は単数対格で単数生格と同形になるが、外国人の場合、初級段階では誤って主格単数を用いてしまうことがよくある。上の文章は、正しくは、„Przepraszam, czy pan może na chwilę przytrzymać mojego psa?” (すみませんが、ちょっと私の犬を見てもらえますか?)

となる。また、マルゲリートは、ポーランド滞在が長くないので、ポーランド語が十分にできないことを伝える場面がある。

Margueritte : Ja jestem tu dwa roky. I nie bardzo nauczyła...

Jacek : ... się ... (się が要るよ)

再帰代名詞の się を忘れることは外国人のポーランド語ではしばしば見られるが、上例はその点をよく表している。また、ポーランド語の数詞は数年の学習では克服できないほどに難しく、マルゲリエートのポーランド語には当然数詞のミスもある。過去形の人称語尾も正しくない。マルゲリートは次のように言いたかったのであろう。

Margueritte : Mieszkam tu od dwóch lat, ale nie za bardzo nauczyłam się (polskiego).

(ここに2年住んでいるけど、まだ十分にポーランド語ができないの)

テレサが映画の出演料としてもらった額はわずかに1300ズウォティだった。これについて、ラスコフスキは、「制作者サイドは、[テレサを] 俳優業を専門としない者として扱い、エキストラ扱いとしたのだ!!!」<sup>28</sup>と憤っている。テレサは出演料のすべてを両親に渡した。両親はそれを自宅の改装費用に充てたという<sup>29</sup>。

テレサは国外の映画関係者からも注目された。フランスのエージェントのローラ・ムルージ (Lola Mouloudji) が出演交渉のためにポーランドまで来たが、テレサは会うことすらしていない。ポランスキからも誘いがあった。ポランスキは当時既に西側映画界と繋がりを持っており、その頃の彼の妻のバルバラ・クフャトコフスカは西側の映画にも出演している。しかし、テレサはこの誘いも断っている<sup>30</sup>。「さよなら、また明日」のあと、いくつかの出演オファーがあったがなかなか決まらなかった。アンジェイ・ヴァイダ (Andrzej Wajda) 監督の「夜の終りに」 (Niewinni czarodzieje)、ヴァンダ・ヤクボフスカ (Wanda Jakubowska) 監督の「現代史」 (Historia współczesna)、ヤン・リュブコフスキ (Jan Rybkowski) 監督の「今晚町が死ぬ」 (Dziś w nocy umrze miasto) の出演が内定していたが、最終選考に漏れている<sup>31</sup>。結局出演が決まったのは、カジミェシュ・クツ<sup>32</sup> (Kazimierz Kutz) 監督の「種馬」 (Tarpany) とコンラト・ナウエンツキ (Konrad Nałęcki) 監督の「第二の男」 (Drugi człowiek) であった (どちらも封切りは1961年)。

## 5. 恋愛、最初の結婚

テレサの人生で最初の熱烈な恋愛の相手は、1959年に知り合ったトゥシク・ストルミツウォ (Tusik [本名は、ユスティン (Justyn) か?]) StrumiHo) なる人物であった。しかし、ストルミツウォはテレサを棄て、パリに出てしまう。次に現れた男性は俳優兼ジャーナリストのアダム・パヴリコフスキ (Adam Pawlikowski) だった。ふたりの付き合いは、パヴリコフスキが亡くなるまで続いた。彼の戦前の経歴については不明な点が多いが、ワルシャワ生まれのワルシャワ育ちであることは間違いない。国内軍 (Armia Krajowa) に入隊し、ワルシャワ蜂起にも参加した。蜂起終焉後、イタリアに渡り、かの地で医学の勉強を始めるが、途中でやめ、ポーランドに戻る。祖国で医学を学び直すか、卒業はしていない。その後、俳優業に関わるが、ここで彼のオカリナ演奏の腕がプラスに働いた。まさに「芸は身を助く」というわけである。ヴァイダ監督の「地下水道」 (Kanał) でパヴリコフスキはオカリナの演奏を担当している。「地下水道」で出演予定だった俳優が病気のため急遽降板し、ヴァイダは窮地に立たされていた。その代役を務めたのがパヴリコフスキで、ドイツ軍兵士の役で好演した。下水道からの出口に向かい、ドイツ語訛りのポーランド語で「出てこい！」 („Wyłazić!”) と叫ぶ場面は記憶に残る。ヴァイダは次作「灰とダイヤモンド」 (Popiół i diament) の冷静沈着なインテリのアンジェイ役を探していたが、パヴリコフスキがいたことを思い出したのであった。実際、パヴリコフスキは博學で、複数の言語に通じていた (ウルドゥ語のようなポーランド人には馴染みの薄い言語も勉強していた)。彼は仲間内では「ドウドウシ」 (Duduś) の愛称で呼ばれていた<sup>33</sup>。ちなみに、duduś とは「可愛い子ども」という意味である。

パヴリコフスキとテレサが初めて出会ったのは、「白熊」の撮影現場であった。年齢差は18歳もあったが、すぐにふたりは恋に落ちたらしい。クツは言う。「彼女は死ぬほど恋をした。そして、生涯を通じて、パヴリコフスキが自分を愛してくれるよう、ありとあらゆることをした」<sup>34</sup>と。

1961年、テレサは最初の結婚をする。相手はコマーシャル映画製作者のヤン・ザモイスキ (Jan Zamoyski) だった。テレサがこの結婚に踏み切ったのは、彼女を振ったパヴリコフスキに対する腹いせが理由らしい。「彼女は (...) アダムと会う約束をしており、結婚したばかりの夫を連れて現れた。彼女はパヴリコフスキの反応に関心があった。彼がトイレに行って嘔吐した、と彼女は言っていた。彼はショックを受けていた」<sup>35</sup> — とクツは語る。

ザモイスキはテレサより13歳年上であったが、こ

のことはまったく障害にならなかった。テレサの両親の場合も、父親は母親よりひと回り上だった。

ザモイスキとの結婚は破綻する。原因はテレサの飲酒癖だった。「当時私は多忙でした。彼女をブリストル・ホテルや(…)飲み屋から連れて帰るのは、かなり難儀でした。迎えに来て、と電話があります。(…)普通の人なら近寄らないようなとても変な場所に彼女はいるんです。不思議な人たちとそこで飲んでいるんです。すべておかしいことばかりでした」(ザモイスキの弁)<sup>36</sup>

ある時は事故が起こる寸前だったという。ザモイスキが予定より早く帰宅したところ、妻がビニール袋を被って、その中にガス管を引いていたとのこと。妻は酩酊しており、袋に穴が開いていることに気づいていなかった。このため一命をとりとめたのだという<sup>37</sup>。1962年、ふたりは離婚した。

## 6. 再婚

テレサは同じ1962年に再婚した。相手は外国映画の翻訳業に携わるヴウォジミェシュ・コズウォフスキ(Włodzimierz Kozłowski)である。彼もまた13歳年上であった。短い交際期間を経て結婚に至るが、離婚は避けられなかった。

「ぼくらは約10年間一緒でした〔1972年、離婚一註・渡辺〕。いまにして思えば、ぼくらの結婚ははじめからうまくいかないことが運命づけられていたのです。ぼくは自分の仕事が好きで、スタジオに長時間いることが求められましたが、テレサはその間、家にいて、することがありませんでした。こうして仲間たちと会うようになり、ウォッカが…」(コズウォフスキの弁)<sup>38</sup>

コズウォフスキは妻がアルコールに手が出せないように努力した。時には妻からバッグを取り上げ、金を使わせないようにまでした。1963年12月のある夜のことで、テレサが、ポーランド演劇・映画芸術家協会(SPATiF: Stowarzyszenie Polskich Artystów Teatru i Filmu)で待っている夫のもとにブリストル・ホテルから向かおうとしていた時、警察の検問にあった。テレサは夫にバッグを取り上げられていたので、身分証明書を持ち合わせていなかった。こうしてテレサと警察の間ですったもんだがあり、挙句にテレサは警官の一人を殴り、公務執行妨害で逮捕された。テレサに弁護士はついたが、有罪は免れない形勢であった。1964年1月30日、クツがテレサ側の証人として出廷することになっていた。しかし、公判前日にテレサは家を出て戻らなかった。夫は彼女を探しにワルシャワ中を駆けずり回り、ようやく場末の飲み屋でベロンベロンに酔っばらっている妻を見つけた。この状態では出廷どころの話ではなかったが、クツはテレサにサングラスをかけ、終

始沈黙しているように求めたのであった。テレサはこの忠告に従った。判決は一年の禁固刑に加え、罰金3000ズウォティ、裁判費用550ズウォティの支払いであった。テレサ側の弁護士は控訴した。しかし、同年9月7日、ポーランド人民共和国建国20周年記念の恩赦で裁判自体が取り下げとなり、全費用も国家持ちとなったのであった。テレサは祝杯をあげた<sup>39</sup>。

## 7. スタヴィンスキ監督「離婚はしません」(1964年)

「さよなら、また明日」の出演後ほどなくして、テレサはモデル業から離れることになった。遅刻が頻繁になったこと、期日を守らないこと、酔って撮影現場に現れたなどしたため、事務所のオーナーのグラボフスカから契約を解消されたのであった<sup>40</sup>。

しかし、映画界は彼女を忘れていなかった。脚本家として著名なイエジ・ステファン・スタヴィンスキ(Jerzy Stefan Stawiński)が初めて監督としてメガフォンを取る「離婚はしません」(*Rozwódów nie będzie*)に出演することが決まったのである。この作品の出来はけっして悪くないのだが、ポーランド映画史でも取り上げられることの少ないラブ・コメディである。隠れた名作だといえるだろう。映画は3つの短いストーリーから成るオムニバスで、テレサが演じるヨアンナが登場するのはその第2部である<sup>41</sup>。

バシヤ(エルジュビェタ・ケンピンスカ(Elżbieta Kępińska))の誕生日のパーティで、マレク(ズビグニェフ・ドブジンスキ(Zbigniew Dobrzyński))はヨアンナと知り合う。しかし、ヨアンナのガードは固く、マレクの誘いには容易に応じない。喫茶店デートより結婚のほうが先、とマレクを挑発する。マレクは勢いでこの提案を受け入れてしまう。翌日、ふたりは互いのことをほとんど何も知らないまま、結婚する。相手の苗字を知るのも、婚姻届に署名する直前であった。夜、ヨアンナの家に行き彼女の両親に、ふたりが結婚した旨を告げる。驚愕する両親にヨアンナは、瓢箪から駒なのだと説明し、翌朝、離婚すると約束する。しかし、一夜でふたりの距離は急速に縮まり、朝には、マレクの就職先があるグダンスクに一緒に行くことが示唆される。

マレクもヨアンナも不思議なキャラクターとして描かれている。ふたりが交わす最初の言葉から風変わりである。

マレク：ああ、勇猛なヨアンナよ、血潮たぎらすヨアンナよ、汝はもうわれわれの手から逃れられまい。

ヨアンナ：ああ、お前たち若者に欠けているも

の、それは道徳だ。

マレクの台詞は、ヴォルテール (Voltaire) の『オルレアン乙女』 (*La Pucelle d'Orleans*, 1779) のアダム・ミツキェヴィチ (Adam Mickiewicz) によるポーランド語訳 (*Dziewica z Orleńu*) を下敷きになっている。「ヨアンナ」とはジャンヌ・ダルクを指す。一方、ヨアンナの返答は、同じくミツキェヴィチの『父祖の祭り』の第三部 (*Dziady*, cz. III, 1832) からの引用が基になっている。

映画のエンディングは、初稿シナリオとは大きく異なる。以下に、両者を比較してみる。

(初稿シナリオ)<sup>42</sup>

マレク：ヨアンナ！

ヨアンナ：おはよう、マレク。

マレク：起きなよ！

ヨアンナ：どうしたの？

マレク：金かねはある？

(ヨアンナは驚いて彼を見つめる)

ヨアンナ：ガウンを取って！

(マレクは彼女にガウンを投げつける。マレクのがさつな行為に驚くヨアンナは、ガウンを受け取り、身に着け、起き上がる。テーブルからバッグを取り、中を調べ、数枚紙幣を取り出す。マレクは彼女から金を受け取ると、数える)

ヨアンナ：わからないわ…

マレク：十分だ。

ヨアンナ：離婚するのに？

マレク：グダンスク行きの切符にさ。

(映画)

マレク：残るよ。

ヨアンナ：いいえ、グダンスクに行くんでしょ。

マレク：きみの言うとおりで。ふざけてみたんだ。もちろん、グダンスクに行くよ。

ヨアンナ：でも、私と一緒にね。

映画の方が数倍印象的なエンディングに仕上がっていることが、理解できよう。

## 8. レナルトヴィチ監督「全速前進」(1967年)

1966年、スタニスワフ・レナルトヴィチ (Stanisław Lenartowicz) 監督の「全速前進」(*Cała naprzód*) の出演オファーがあった。この作品は、「さよなら、また明日」以来のツイブルスキとの共演となる。

この映画のプロデューサーのヤン・ヴウォダルチ

ク (Jan Włodarczyk) は言う。「キャスティングは行われませんでした。レナルトヴィチは最初からテレサを使うと言っていました。(監督が) 彼女を使うようにと求めたのです。そしてそうなったのです。(彼女は) 際立っていました。この映画が待ち望んでいた、その人でした。(…)他に誰かいるでしょうか」<sup>43</sup>。

テレサの役は容易とは言い難いものであった。ひとりで数人の人物を演じ分けなければならないのである。ツイブルスキが演じる船員のヤネクは航海先で出会った女性たちを回想していく。北欧で出会ったグローリア、港のバーで働くドロレス、ヤネクの船で働くサビーナ、イスラム圏のハーレムにいるポーランド人ヴァンダ——以上の4人の役をテレサが一人で演じた(ドロレスの声のみテレサ自身のもの、あとは吹き替え)。にわか雨の中、雨宿りをする女性(名前は明かされない)も含めると5人を演じたことになる。既に「離婚はしません」でコメディにおける才能の片鱗を見せていたが、「全速前進」でテレサはその才能を余すことなく発揮したのであった。映画の封切りは1967年2月15日、すなわちツイブルスキの事故死(同年1月8日逝去)のあとであった。

## 9. かつての恋人パヴリコフスキ

1967年、パヴリコフスキはイタリア語の通訳としてイタリアのテレビ局に同行してポーランド国内を回っていたところ、公安当局に疑いの目をもって見られた。当時、ヴワディスワフ・ゴムウカ (Władysław Gomułka) 政権を批判する、「静かな奴らとうるさい奴ら、すなわち大統領の許での舞踏会」(*Cisi i gęgacze, czyli bal u prezydenta*) という怪文書が出回っていた。「静かな奴ら」とは公安のことであり、「うるさい奴ら」とは当局と関わりを持つ知識人のことを指す。公安が、この文書の作者が詩人で風刺作家のヤヌシュ・シュポタンスキ (Janusz Szpotański) か、とパヴリコフスキに問うたところ、彼は事実だとあっさり認めたのである。この一件で彼は映画界から追放された。さらに、同性愛者あるいは両性愛者との噂を流され、パヴリコフスキはしだいに神経を病むようになる。1976年1月17日、9階の自宅マンションから投身自殺を図り、亡くなった。映画監督のイェジ・グルザ (Jerzy Gruza) によると、パヴリコフスキは「晩年、この嫉妬の世界から逃れるため、イエズス会の教典を学び、日本語を勉強していた」<sup>44</sup>とのこと。

テレサは兄のボグダンに、パヴリコフスキを救えなかったのかと聞かれた時、「何ですって！ 彼の首根っこを掴んでいたらってこと？ (自ら) 望んで、跳び下りたんだから」と答えたという<sup>45</sup>。兄の

語るところでは、パヴリコフスキの自殺以降、テレサは坂を転げるように没落していったとのこと<sup>46</sup>。

## 10. 「全速前進」以後の出演作品

テレサは「全速前進」のあと、1967年にレナルトヴィチ監督の「郵便局長」(*Poczmistrz*)に出演している。この作品はテレビ映画として作られたもので、アレクサンドル・プーシュキン(Александр Сергеевич Пушкин)の『ペールキン物語』(*Повести покойного Ивана Петровича Белкина*)の中の「駅長」(*Станционный смотритель*)を映像化したものである(当然、原作との違いはある)。テレサは主人公の一人娘のドゥーニャ役を務めた。

1967年にはチェコスロヴァキア映画の「スリ」(*Vreckari*)に、翌年にはやはり同国の「プラハの夜」(*Pražské noci*)に出ているが、作品の出来は芳しいとはいえない。かつて、外国映画界からの招待をことごとく斥けたテレサであるが、どういう心境の変化があって隣国の映画界からの誘いを受け入れたのであろうか。

1970年、最後の作品となる、スタヴィンスキ監督「誰がコウノトリを信じるか」(*Kto wierzy w bociany?*)に出演した。17歳の息子を持つ34歳の母親を演じたが、当時28歳のテレサはメイクをしてもなかなか老けて見えなかった。息子役を演じたレフ・ウォトツキ(Lech Łotocki)は当時23歳で、テレサとの年の差はわずか5歳でしかない。これで親子を演じろというのだから、キャスティングのミスとの誹りは免れないだろう。

テレサのフィルモグラフィには、最後の出演作品として、1972年のエゴン・ギュンター(Egon Günther)監督の東ドイツ映画「鍵」(*Die Schlüssel*)があげられていることが多い。しかし、どこをどう探してもこの作品にテレサの姿形を認めることはできない。なんらかの理由により、編集段階で出演場面がカットされたようだ。

## 11. 映画界を離れてから亡くなるまで

パヴリコフスキの自殺のあと、テレサはインテリ層との交際を避けるようになり、アルコール漬けとなった。ヴウォダルチクは1980年代の末ごろにワルシャワのある公園で、鳩に餌をやっているテレサに偶然出会ったという。彼が声をかけても反応を示さなかったとのこと。自分の世界に閉じこもり、かつての知り合いと話しをするより、鳥に話しかける方を好んだようだ<sup>47</sup>。

1990年、テレサは3度目の結婚をする。相手はヤン・ペジナ(Jan Perzyna)というごく普通の労働者だった。かつて彼女とモデルとして働いていたグラジナ・ハゼ(Grażyna Hase)は、ある時、テレサが

金を借りて現れたことを覚えている。容姿は大きく変わっていたが、声と目からテレサだと判ったという<sup>48</sup>。

1997年3月19日、テレサは亡くなった。死因は脳梗塞か脳出血らしい。葬儀は兄が行なった。ペジナは葬儀費用すら出す余裕がなかったからである。テレサは3度結婚したが、子どもは残していない。彼女は自分が亡くなる前に妹のヴァツワヴァ(家族の間では、マウゴシャと呼ばれていた)を亡くしていた(1994年7月14日逝去)。死因はアルコール中毒によるものであった。妹を酒の世界に引き込んだのもテレサであった<sup>49</sup>。

## おわりに

2015年11月25日、同年9月5日に往年の名女優である原節子が亡くなっていたことが報道された。原は43歳で映画界を離れると、生涯独身のまま、ひっそりと余生を送ったという。早すぎる引退の理由については諸説あるが、老化との闘いは美人女優にとって宿命的といっていだらう。情報が蔓延する今日のネット社会にあっても、彼女の晩年の写真は、管見では、ひとつとして流布していない。引退後は一枚の写真も撮らせようとしなかったのではなかろうか。

テレサ・トゥシンスカの場合はどうだろうか。筆者は遺族に単刀直入に、彼女の晩年の写真を見せてほしいと願い出た。写真はない、というのが回答だった。この言葉に疑いを唱えることは自由であるが、筆者としてはとりあえず額面通りに受けとめようと思っている。テレサはいまワルシャワの北墓地(Cmentarz Północny)で妹と同じ墓で眠っている。墓には、「さよなら、また明日」の写真がはめ込まれている。17歳の時のテレサの姿である。

筆者は時々、テレサがいまも生きていて女優を続けていたらと考えることがある。ポーランドの俳優には歌唱力のある人が多いが、彼女の場合はどうだっただろうか。また、演劇(舞台)の世界でも成功していただろうか。俳優業からの早期の離脱と早すぎる死去が惜しまれるばかりである。

## 註

1. 「往年の女性たちはいまいずこ」と題する記事が1996年に著されているが、その中でテレサも取り上げられていた(Maciej Maniewski, *Gdzie są dziewczyny z tamtych lat?*, *Film*, nr 6, 1996)。
2. Mirosław J. Nowik, *Tetetka. Wspomnienia o Teresie Tuszyńskiej*, Warszawa 2013 以前に著されたテレサに関する評伝は、管見では、Krzysztof Trojanowski, *Teresa Tuszyńska: krótka historia pewnej gwiazdy* [w:] *Kino polskie wczoraj i dziś. Polskie kino*

- popularne*, red. Piotr Zwierzchowski, Daria Mazur, Bydgoszcz 2011, が唯一である。
3. Sławomir Koper, *Stracone pokolenie PRL*, Warszawa 2014; Emilia Padoł, *Damy PRL-u*, Warszawa 2015; Iwona Kienzler, *Uwodzicielki, skandalistki i seksbomby PRL*, Warszawa 2015, には 2, 30頁程のテレサに関する章が設けられている。いずれも、先行研究である Nowik, *op. cit.* に大きく依拠している。本稿もまたしかりである。
  4. Tamże, s. 15-16.
  5. Tamże, s. 16-17.
  6. Tamże, s. 23.
  7. Tamże, s. 24.
  8. Kienzler, *op. cit.*, s. 198.
  9. Nowik, *op. cit.*, s. 25.
  10. Tamże, s. 26.
  11. Tamże, s. 27.
  12. Tamże, s. 26-27.
  13. ポーランドでは映画演劇大学を経ずに俳優になることは稀である。エヴァ・ヴィシニェフスカ (Ewa Wiśniewska)、ポラ・ラクサ (Pola Raksa)、バルバラ・クファトコフスカ (Barbara Kwiatkowska) のように、公募などで女優になった例がないではないが、レアケースである。
  14. Nowik, *op. cit.*, s. 32.
  15. Tamże, s. 40.
  16. Kienzler, *op. cit.*, s. 203-204. テレサがアルコール依存症になったのは、パヴリコフスキが酒好きであったことも影響しているらしい (zob. Trojanowski, *op. cit.*, s. 358)。
  17. Violetta Szostak, *Jadwiga Grabowska. Warszawska Grabolka podbija świat mody*, [http://www.wysokieobcasy.pl/wysokie-obcasy/1,100958,12275304,Jadwiga\\_Warszawska\\_Grabolka\\_podbija\\_swiat.html](http://www.wysokieobcasy.pl/wysokie-obcasy/1,100958,12275304,Jadwiga_Warszawska_Grabolka_podbija_swiat.html)
  18. Łukasz Figielski, Bartosz Michalak, *Prywatna historia kina polskiego*, Gdańsk 2005, s. 164.
  19. Kienzler, *op. cit.*, s. 205.
  20. 映画では、マルゲリートが外国人であることはわかるのだが、国籍は特定できない。テレサはインタビューでその点を問われると、「タンガニーカかしら」とふざけて答えている (J. B., Teresa Tuszyńska. Gość z Tanganiki, *Film*, nr 15, 1960, s. 7)。
  21. Kienzler, s. 205-206.
  22. Tamże, s. 206-207; Figielski, Michalak, *op. cit.*, s. 164.
  23. Tamże, 165. しかし、実際の映像ではテレサはそれほど涙目になっていない。編集の段階でカットされたことが考えられる。
  24. しかし、ツイブルスキは作品の出来に不満だった。特に、ヤツェク役を演じた自分の年齢が上過ぎると感じていた (ツイブルスキは1927年生)。ヤツェクも実年齢が17歳くらいの俳優が演じるべきだったとの意見であった。ツイブルスキはそうした俳優として、ヴワディスワフ・コヴァルスキ (Władysław Kowalski) の名をあげていた (Mariola Pryzwan, *Cybulski o sobie*, Warszawa 2012, s. 65)。ちなみに、コヴァルスキは1936年生まれである。
  25. Marian Bielicki, Współczuję Morgensternowi, *Film*, nr 20, 1960, s. 6.
  26. Jerzy Płażewski, Będę miał miłość wielką czy maleńką, *Przegląd Kulturalny*, nr 19 (401), 1960. Nowik, *op. cit.*, s. 74. より再引用。B. という匿名で書かれた、次の論評もテレサの演技力を高く評価してる (B., Do widzenia do jutra. Romantyczna przygoda, *Wiadomości filmowe*, nr 17, 1960, s. 8)。
  27. Krzysztof Teodor Toeplitz, Do widzenia, do jutra, *Świat*, nr 19 (459). Nowik, *op. cit.*, s. 70. より再引用。
  28. Figielski, Michalak, *op. cit.*, s. 167.
  29. Kienzler, *op. cit.*, s. 211.
  30. Tamże. パヴリコフスキから離れたくなかったので、外国からのオファーを拒めたのであろう、とジャーナリストのコペルは考えている (Koper, *op. cit.*, s. 162)。
  31. Kienzler, *op. cit.*, s. 211.
  32. クツによると、テレサに禁酒するように求めたところ、彼女は交換条件として肉体関係を迫ったとのこと。彼女は類いまれなユーモア感覚の持ち主だったというが、この時は冗談めきだったらしい (Nowik, *op. cit.*, s. 98, 130)。
  33. Kienzler, s. 212-213.
  34. Nowik, *op. cit.*, s. 134.
  35. Tamże, s. 135.
  36. Tamże, s. 138.
  37. Tamże, s. 163.
  38. Tamże, s. 140.
  39. Tamże, s. 150, 153.
  40. テレサにとっては、モデルよりも女優としての仕事の方に興味があったことは、次の彼女の発言からもわかる。「「さよなら、また明日」のオファーがあった時、私はモデルとして外国の3か国に出かけることになっていました。ポケットにパスポートを入れていましたが、この魅力的な誘いをすぐに断り、映画に出ることを決めました」 (Młodość, uroda, wielka nadzieja, rozmawiała M. D., *Wiadomości filmowe*, nr 1, 1960, s. 7)。
  41. 初稿シナリオ集 (Jerzy Stefan Stawiński, *Scenariusze filmowe, wybór i opracowanie Barbara*

Giza, Warszawa 2009) によると、テレサの出るパートは第1部に予定されていたようだ。

42. Stawiński, *op. cit.*, s. 128-129.
43. Nowik, *op. cit.*, s. 101.
44. Kienzler, *op. cit.*, s. 225.
45. Nowik, *op. cit.*, s. 159.
46. Tamże.
47. Kienzler, *op. cit.*, s. 225-226.
48. Tamże, s. 226. テレサの容貌の変化については、映画評論家・ジャーナリストのヴィエスワヴァ・チャピンスカも書いている。チャピンスカは1980年初めに「スクリーン」(*Ekran*)誌編集部でテレサと出会った時のことを、こう記している。「変わっていた。太った。あのかつての表情は消えていた。笑顔だけが変わっていなかった。特別な、光り輝くあの笑顔は(…)」(Wiesława Czapińska, Nieobecni, *Pan*, nr 11, s. 105. Trojanowski, *op. cit.*, s. 359. より再引用)。
49. Tamże.

#### 謝辞

本稿作成にあたり、テレサ・トゥシンスカのご遺族である、兄のボグダン・トゥシンスキ (Bogdan Tusiński) 氏、義姉マリア・トゥシンスカ (Maria Tusińska) 氏、姪のマウゴジャタ・トゥシンスカ (Małgorzata Tusińska) 氏、並びにテレサのファンにして研究者の軍事通信研究所 (Wojskowy Instytut Łączności) のマレク・レシニェヴィチ教授 (prof. Marek Leśniewicz) に多大なご協力をいただいた。記して、謝意を表するしだいである。

